

「ヤコブの結婚」(創世記二九・一～三五)

1 恐れとおののき

ヤコブの人生を共に辿っています。先週は、逃れの旅へと出たヤコブを見たところ
です(二八・一〇～二二)。

先週の箇所には、出発してまもなくの、一つのエピソードが語られていました。不思議な夢のことです。それは素晴らしい夢で、天と地が階段でつながっていて、神の御使いが上り下りしていたというのです。

夢というのは、この前の祈禱会でも話題になったのですが、聖書では、多くの場合神が御心を伝える手段の一つとされています。新約聖書でもそうです。すぐ思い出すのは、ヨセフのことです。マリアと婚約していたヨセフは、マリアが身重になったことに気づいて離縁することを決心します。そのとき主の天使が「夢」に現れてマリアを妻として迎えるように告げるということがありました。それに従ってヨセフはマリアを妻とします(マタイ一・二〇)。

ヤコブの場合も、夢はたんなる夢ではなくて、神の啓示としての夢です。神様が直接姿を現すわけではありません。しかし夢の中で、確かにヤコブに出会い、語ってくださいだったので。ヤコブはそれを聞き、神の語りかけとして受けとめます。次の朝早く、枕としていた石を立てて——相当大きな石だと考えられます——、その場所を神の聖所(礼拝所)とし、さらに十分の一をささげると誓います。そしてそこに私どもはヤコブの信仰と服従とを見てとったのです。

神が夢で現れ、語りかけてくださったことを、ヤコブは受けとめたと、いま申し上げました。しかしそれは、そこに何の驚きも、何の恐れもなかったということではありません。夢から覚めてヤコブが言ったことに、今日もう一度注意しておきたいと思えます。

「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった」。そして、恐れおののいて言った。「ここは、なんと畏れ多い場所だろう・・・」(一六～一七節)。

「恐れおののいて」、恐ろしさに震えるばかりになって、というのが、神の現れに接したときのヤコブの反応でした。

ヤコブと同じく聖書の神の人はみな、神の現れに恐れを抱いたのです。アブラハムも(一五・一)モーセもそうでした(出エジプト三・六、使徒七・三二)。新約の使徒たちも恐れ、初代教会の人びとも、礼拝をささげているここに神がいますと、恐れ
の念に満たされたと伝えられています(使徒二・四三)。

ヤコブの場合、別な意味でも神を恐れなければならない、神の目を避けたいと思う理由がありました。いうまでもなく、兄エサウを欺して、長子権を、そして父イサクの祝福を奪い取ったことです。

ここでヤコブは、神がこの場所におられることをわたしは知らなかったと言っています。裏を返せば、神には、自分のしたことが、いや自分という人間が、みな知られていくことがいま分かったということです。ぞっとしたでしょう。それが、このときのヤコブの恐れおののきです。

ヤコブは一呼吸置きます。わたしが立っているところは神のいます場所、この足下に神がおられる、それは、なるほど恐ろしいことかも知れない。しかしすべてが知られていて、何も隠さなくていい、その分、それは、彼にとつて、解放であり、自由であり、喜びですらあったのです。その上神はヤコブに、わたしはあなたと共にいる、必ず連れ帰る、約束したことを果たすまで決して見捨てない（一五節）と語ってくださいました。

この神に、すべてを委ねよう、この神のためにわたしもできることをしよう、その思いがヤコブに芽生えます。こうしてヤコブは、申し上げたように、そこを神の聖所と定め、誓いを立てた。それが、ここで明らかになったヤコブの信仰と服従にほかなりません。

2 出会い

さてヤコブの逃れの旅路、今日の箇所は、目的地に無事に到着したところから始まっています。

この日から二〇年、異郷での生活が始まります。この間のことが三一章の終わりまで、三章にわたって記されています。ヤコブの帰郷を語るのは三二章からです。講壇の予定としては、今日の箇所のあと、三〇、三一章は、エピソード満載の箇所ではありませんが、割愛して、三二章に進む予定です。

そこで今日も少し、この二〇年の間に起こったこと、あらかじめ申し上げておくことにします。

まず今日の箇所です。目的地ハランに着いたこと、それからヤコブの結婚のことが語られています。次に、ヤコブの子らについて、一二番目のベニヤミンはまだ生まれていないので、息子一人、娘一人のことが、書かれています（三〇章）。その後、帰郷を願うヤコブと、それを引き止めて自分のところでもっと働かせようとする伯父ラバンとの間に争いが生じます。ついにヤコブは脱走、ラバンはそれを追いかけます（三一章）。しかし最後のところで、神が、ここでも夢で、ラバンを説得したこともあって（三一・二四）、二人は和解し、それぞれの領地の確認をし、晴れてヤコブは故郷に帰ることができるようになります。

さて今日の箇所のはじめに戻ります。ヤコブは目的地付近に到着します。

ヤコブは旅を続けて、東方の人々の土地へ行った。ふと見ると、野原に井戸があり、そのそばに羊が三つの群れになって伏していた。その井戸から羊の群れに、水を飲ませることになっていたからである。ところが、井戸の口の上には大きな石が載せてあった。まず羊の群れを全部そこに集め、石を井戸の口から転がして羊の群れに水を飲ませ、また石を元の所に戻しておくことになっていた（一〜三

節)。

井戸のそばでの出会い、聖書ではなじみの光景です。羊を飼って生活している人々にとって、井戸辺は、交流の場でもあります。

とくにこの場面は、父イサクの結婚の場合も同じだったことを、私どもに思い出させます(二四章)。イサクの結婚相手を探しに、かつてこの地に来たアブラハムの召使い、彼も井戸のそばで、リベカを見いだします。細部は少し違っても、同じような話になっています。

ここで一つ面白いのは、井戸を巡る、つまり羊に水を飲ませる、この地の当時の習慣が、ヤコブの故郷カナンの地の習慣と少し違っていたと思わせるところがあることです。

ヤコブがここに来たとき、羊が三つの群れになって伏していたとあります。つまり羊が集まるのを待っていたのです。この井戸を利用する羊の群れが全部集まらないと、井戸の蓋の石をどかして水を飲ませることをしない。石は、みんなと一緒でない動かせないような大きなものでした。

ヤコブには、それはきわめて非効率的に思われたようです。ヤコブは少し後のほうで(七節)、こう言っています。羊の群れが全部集まってから、ようやく石をどかして水を飲ませるということではなく、いつでも、必要なとき、さっさと飲ませて、またすぐに草を食べさせに行ったほうが、ずっといいのではないかというのです。ヤコブの性格を垣間見させるような言葉ですし、メソポタミアとカナンの習慣の違いかも知れません。

とはいえ、羊飼いたちがたむろしていたために、ヤコブは、伯父ラバンが近くに住んでいることや、娘のラケルが羊の群れを連れてすぐにやってくることなど——ラケルの名前の意味は〈雌の羊〉です——を知ります。ヤコブはこうしてはじめてラケルの名前を聞き、実際彼女が羊を引いてきたときには、もうすっかりラケルに心を奪われてしまったようです。そしてこんな行動に及んでいます。

ヤコブは、伯父ラバンの娘ラケルと伯父ラバンの羊の群れを見るとすぐに、井戸の口へ近寄り石を転がして、伯父ラバンの羊に水を飲ませた。ヤコブはラケルに口づけし、声をあげて泣いた(一〇〜一一節)。

石をどかすのは、みんなが協力してすべきこと、この地の習慣、規則にかんがみてそのように想像するのですが、この記述はまるで、ラケルの羊のためだけに、ヤコブが一人で石を動かし、いわば怪力をふるって見せた、というような書き方になっています。ラケルへのアピールでもあったのでしょうか。

3 結婚

井戸辺での最初の出会いのときから、ヤコブは、ラケルに思いを寄せるようになってのです。こうしてラケルを愛したことが、愛したことが悪いというわけではありませんが、この後のヤコブの結婚にも、そこにつくられる家族にも、大きな影響を及ぼす

ことになります。一ヶ月たったころ、ラバンは、ヤコブにこう切り出します。

お前は身内の者だからといって、ただで働くことはない。どんな報酬が欲しいか
言ってみなさい（一五節）。

この言葉は少し微妙です。身内でなければ、雇い人が奴隷です。雇い人とは、例え
ば羊飼いです。雇われ、報酬をもらって働く人です。ラバンの言葉によるとヤコ
ブは身内ではあるけれども、報酬をやるというのですから、雇い人の地位に落とされ
ることもありえます。ラバンは、最後まで、ヤコブをそのように見なし、利用しよ
うとしたように見えます。

ヤコブはラケルとの結婚を希望し、申し出ます。当時の考えでは、娘は父の所有で
すから、結婚に当たっては、何らかの補償金（結納金）が必要でした（出エジプト二
二・一五）。昔、アブラハムの召使いは、リベカをイサクの妻に迎えるために、「金
の装身具や衣装」（二四・五三）など高価な贈り物を携えていったのです。ラバンも
昔のこととはいえ、妹リベカのときを覚えているはずで、しかしヤコブは逃
亡の身、妻を迎えるための高価なものなど何一つも持っていません。彼は労働奉仕をも
ってそれに代えたのです。こうしてラケルとの結婚のため、最初の七年を過ごします。
「ほんの数日」（二〇節）ようにしか思われなかったとは言え、必要以上の年月であ
ったことは間違いありません。ラバンは働かせることができると、これで味をしめた
かも知れません。

しかしヤコブは婚姻のその夜、欺かれて、姉レアと夫婦となってしまうのです。か
つて兄を欺したヤコブ、ここでは、もの見事に、欺されてしまいます。なぜ、ラバ
ンが、姉のレアを、ヤコブのもとにやったのか、はっきりは分かりませんが、ヤ
コブがラケルと結婚したがつていることを利用して、使用人として引き止めておこう
としたことが考えられますが、分かりません。かつて欺したヤコブが欺されたことだ
けは確かです。

一週間の婚宴を終えて、ようやくラケルも妻としたヤコブ、さらに七年の労働を余
儀なくされたのです。姉妹をめとる重婚は、後の律法では禁じられています（レビ一
八・一八）。この時代には知られていませんでした。

結婚後も、ヤコブはラケルを愛します。レアは疎んじられます（三一節）。レアと
ラケル、姉妹の間に、亀裂が生じます（三一節、三〇・一）。レアには次々に息子が
生まれますが、ラケルには生まれません。ラケルは側女をヤコブに与えて子を得よう
とします。レアも、子供ができなくなると、彼女の側女を与えて、自分の子供としよ
うとするのです。

さて今日の箇所、私どもどのように考えたらいいのでしょうか。三〇節まで、主な
る神、神という言葉は現れません。神の働きは、こうした最も低い世俗性の中まで下
り、気づかれることなく隠されているのです（フォン・ラート）。実際、レアがいな
ければ、レビ（三四節）もおらず、ユダ（三五節）もいません。レビがいなければモ
ーセはおらず、ユダがいなければダビデもいないのです。神が救いのために、気づか
ないところで、私どものためにいつも働いておられることをキリストにあって信じて
歩んで参りましょう。

（一〇月九日）